

私たちは映画

『シン・エヴァンゲリオン劇場版:||』

をどの
見たの
か

私たちは映画

『シン・エヴァンゲリオン劇場版:||』

をどのように
見たのか

この冊子は、武威野美術大学（二〇二二年九月開催のオンラインオープンキャンパスで、芸術文化学科（芸文）の模擬授業として実施するオンライン・レクチャー「私たちは映画『シン・エヴァンゲリオン劇場版』をどのように見たのか」（春原担当、二〇二二年九月二十五日十四時―十四時五〇分）の、参加者のための配付資料・参考資料として作成したものです。この授業は、今年（二〇二二年）公開されて社会に大きな反響を引き起こし、約二十五年にもわたる長期の展開を完結させたアニメ映画作品『シン・エヴァンゲリオン劇場版』について考えるものです。

芸文は、「芸術文化と社会をつなぐ」を使命として、アートとデザインの視点を活用して、人がより豊かに生きる提案を行うプロフェッショナルの育成を目指しています。芸文には、作品を作る表現を学ぶ授業、鑑賞や歴史の理論を学ぶ授業、作品と受け取り手のつなぎ方の実践を学ぶ授業もあり、それらの基礎に「芸術文化学」という学問領域を設定しています。

その視点から「作品」を考えると、作品がどのように作られてどんな特徴を持っているのか、という内部の検討も重要ですが、同時に、作品がいかに受け取られたのかという外側（受容）も大切な観点となります。作品と人々、社会がどのようにつながっていたのかを考えてみたいのです。それが今回の模擬授業の重要なテーマとなります。さらに、芸術文化には、代表的に語られるアート・美術以外にも多様な「表現」が含まれています。ポップカルチャーと呼ばれる表現も、私たちの日常に身近な「表現」として存在しています。「芸術文化学」が幅広い「表現」をどのように読み解くことができるのかといった観点にも注目します。

冊子の執筆・編集を担当したのは、この授業の目的・内容に関心を持って、「現代メデイ

ア文化」についての三回の自主的な勉強会（二〇二二年七月―八月）を実践した、芸術文化学科三年の学生有志です。二〇二二年の『シン・エヴァンゲリオン劇場版』の上映期間中に、来場者特典（第四弾）として「公式謹製三十六ページ冊子『EVA-EXTRA-EXTRA!』」が配付されました。この冊子は、SNS上などで「シンエヴァの薄い本」「薄い本」は「同人誌」を指す呼称」と呼ばれていましたが、それを参考にして今回の授業の配付資料を「薄い本」として準備したら面白いのではないか、というのが作成のきっかけです。

芸文が考える、芸術文化と社会の接続を達成するための主要な領域が、ブランニング（企画・立案）、マネジメント（運営・経営）、ミューゼオロジー（博物館学）ですが、いずれの領域でも、企画を的確・魅力的に提示したり、企画のまとまった記録を作成したりするためのデザインの力が必要となります。そのために、デジタルデザイン関連の授業や、「デザイン基礎」「編集計画」といった、デザイン理論、ソフトウェアの活用技術、編集の思考・技法を学ぶ基礎的・専門的授業があり、そのような専門性のひとつのあらわれとして、今回の模擬授業では、学生が編集・制作した冊子を提示できると芸文の特色が伝わりやすいのではないかと、いうのもねらいでした。このように、芸文の多面的な複数の特徴が、この冊子に落とし込まれています。

この冊子の作成と模擬授業の準備に当たっては、執筆・編集やアンケート調査への参加など、芸術文化学科の学生みなさんの協力をいただきました。記して御礼申し上げます。さらに、この冊子を手にとってくれた芸文ウェブ・オープンキャンパス参加のみなさん、関心を持って下さり誠にありがとうございます。みなさんが芸文を知る一助になれば幸いです。

序	2
---	---

第壹話 模擬授業「私たちは映画『シン・エヴァンゲリオン劇場版』をどのように見たのか」 実施のための覚書	6
--	---

第貳話 彼らにとつてのエヴァ——私は『シン・エヴァ』をどのように見たのか	12
なぜ「私は『シン・エヴァ』をどのように見たのか」を語る必要があるのか	12
折原彰、彼女の場合	14
加藤ひなの、彼女の場合	18
山口衣織、彼女の場合	22
春原史寛、彼の場合	30

第参話 アンケート、その答え——あなたはどのように『シン・エヴァンゲリオン劇場版』を見ましたか？ 美大生の視聴行動と意識調査	38
あなたは『シン・エヴァンゲリオン劇場版』（二〇二一年三月公開映画）を観ましたか？	38
観た方は、なぜ、どんなきっかけで観ましたか？	39
観ていない方は、その理由は何ですか？	40
観ていない方は、本作をめぐる社会状況（流行や評価、広報、関連番組等の放映）などについて、 どのように感じますか？	41
観た方は、本作の評価はどうですか？	42
観た方は、作品や作品をとりまく状況について、どんな感想を持ちましたか？	43
視聴したことのある、『エヴァンゲリオン』作品を教えてください。	46
あなたが『エヴァンゲリオン』シリーズを知った、観たきっかけや理由、 その時期（年齢）、視聴当時や現在の自分にとつての意味や影響について、自由に教えてください。	47

第四話 エヴァの軌跡——『シン・エヴァンゲリオン劇場版Ⅲ』関連事項略年譜	52
編集後記	56

模擬授業「私たちは映画『シン・エヴァンゲリオン劇場版』をどのように見たのか」実施のための覚書

一 二の授業の目的

一― 芸術文化学とは

人間が作品の創造や鑑賞などの行為によって心身の充実を追求する「芸術」および、精神的・身体的活動を通して確立・継承し変化させ続けてきた「文化」と、さらにそれらの社会における活用について、領域横断的かつ実証的・実践的に研究する学問領域

↓社会に存在する多くのものを包括するために、時代に即して無限に拡張・変化する「文化」の概念を活用
↓あらゆる表現や文化が学問（大学などで行う学術研究）の対象となる

一― 二 ポップカルチャーとアート（芸術文化）の関係性

【ポップカルチャー】

○趣味（「推し」）が支えるメディア文化の、日常のなかで広がり、消費され続ける世界・推し、いいね、信頼、私的（娯楽的）・消費されるもの＝瞬間の充実に作用するもの、忘却されていくもの
・主にデジタルメディア、マスメディア（放送・出版）を介して受容されるコンテンツ作品エンターテインメント
○日常の時間（空間）における体験の束として経験される、生活と共存する（タイミングやデバイスを問わない）、他者との体験の共有性が高い
↓視聴経験の共有、ネタバレ注意

【アート】

○一定の基準と伝統（継続性）が支え、日常を越えて展開するアート（芸術文化）の世界
・評価、信用、公共的（社会的、教育的）・鑑賞されるもの＝人をかたちづくり充実させるもの、歴史化されていくもの
・アート、芸術作品
○非日常における強烈な体験として経験されることがある、世界の見方（体験の仕方）を更新していくもの、生活を変革する、より個々人に作用する

一― 三 アート以上に身近な表現としてのポップカルチャー

・生活の場においては、アート以上にアニメ・マンガ・ゲームに救われてきた経験
アート以上に身近なポップカルチャーの表

現

・アートとポップカルチャーの関係、メディア・アートの存在…文化庁メディア芸術祭
↓すべての文化が芸術である瞬間がある、芸術として受容することができる。
・あなたを形作ってきた表現とは何か？
↓表現をめぐる個人史・芸術文化に関連するあらゆる体験と伴走するポップカルチャーの表現

のように生み出され、現代日本を生きる我々にどのような影響を与え、いかに消費・受容されているのかを考察し、イメージの分析方法やそれらを読み解くリテラシーについて学ぶ。

二 『シン・エヴァンゲリオン劇場版』というコンテンツ

二― コンテンツの歴史とその寿命

【テレビ・アニメーション版】

・『新世紀エヴァンゲリオン』（一九九五年十月四日～一九九六年三月二十七日放送）

【旧劇】

・『新世紀エヴァンゲリオン劇場版 シト新生』（一九九七年三月公開）
・『新世紀エヴァンゲリオン劇場版 Air/まごころを、君に』（一九九七年七月公開）
・『新世紀エヴァンゲリオン劇場版 DEATH (TRUE)2 / Air/まごころを、君に』（一九九八年三月公開）

【新劇場版】

・『エヴァンゲリオン新劇場版：序』（二〇〇七年九月公開）

一― 四 大学で学ぶ芸術文化としてのポップカルチャー

・人間が作り出す様々な「イメージ」（主に視覚的なもの）を取り扱う。それらがど

・『エヴァンゲリオン新劇場版：破』（二〇〇九年八月公開）

・『エヴァンゲリオン新劇場版：Q』（二〇一二年十二月公開）

・『シン・エヴァンゲリオン劇場版』（二〇二二年三月公開）

二― 二 コンテンツは社会のなかで
孤立して存在しない
―― コンテンツの境界線

・二〇一九年十二月二十七日に公開時期が二〇二〇年六月二十七日と発表。二〇二〇四月十七日…新型コロナウイルス流行の影響で公開延期。二〇二二年一月十四日…新型コロナウイルス感染拡大の影響と、緊急事態宣言を受けて公開再延期。

↓コロナ禍 緊急事態宣言下の映画館で映画を見るということの特殊性。

・コンテンツのマネジメント（コンテンツの産業としての性格…どのように伝達するのかのマーケティング、ブランディング、

広報、来場者特典、関連イベント、商品、上映館の環境・立地・地域・運営方針

・創作の秘密を知りたい私たち…『プロフェッショナル 仕事の流儀 庵野秀明スペシャル』

（二〇二二年三月二十二日、NHK総合）、『さようなら全てのエヴァンゲリオン 庵野秀明の1214日』（二〇二二年四月二十九日、NHKBS1）、『シン・エヴァンゲリオン オールナイトニッポン』（二〇二二年六月二十二日、ニッポン放送）

・考察を誘発する作品の特質…多数の「考察」するテキスト、動画の存在、さまざまなレビュー

・二次創作

・二〇二二年三月八日…日本における劇場公開。二〇二二年九月八日…配信による海外公開。三月に日本において商業公開された映画は約百作品ある。全国規模での公開作品はより少数だが、どんな作品と同じ時

期に見ることができ、そのなかで『シン・エヴァンゲリオン』が見られていること。

二― 三 専門家たちはどのように見たのか
―― 批評・評論

・（誠）「高畑のアニメを超克」『読売新聞』二〇二二年三月十二日夕刊、三面
・浜崎洋介「ナビゲート2021」『シン・エヴァ』と「成熟」『毎日新聞』（東京版、二〇二二年三月十七日夕刊、四面）

・東浩紀「四半世紀の伏線 見事回収」『朝日新聞』（東京版、二〇二二年三月十九日朝刊、二十七面）

・須川亜紀子「女性たちの持つ役割に注目」『朝日新聞』（東京版、二〇二二年三月十九日朝刊、二十七面）

・藤津亮太「過去作に誠実に向き合った」『朝日新聞』（東京版、二〇二二年三月十九日朝刊、二十七面）

・斎藤環「キャラに自己投影 ファン共感」

三 私たちは映画

『シン・エヴァンゲリオン劇場版』
をどのように見たのか

↓個人の視聴体験の唯一性を考える。高い解像度による体験の記録や表現。

四 作品・表現をめぐるさまざまな

コミュニケーション
（知覚・感情・思考・情報の伝達
通信・交流・関係）

四― 一 コンテンツの歴史とその寿命

・発注↓制作→作品・表現↓仲介↓受容
・表現の対象
・表現の規則

四― 二 表現と私たちの接点

・ある芸術文化を社会につなぐためには、その「作品」「表現」についてできるだけ多数、多種類の接点（観点、視点）を自分のなかを持っていることが重要。日常生活のなかの身近な接点も、学術性の高い専門的な接点もある。

・接点とは、人にとっての価値や魅力の在処

・提示できる接点多ければ、社会においてある人が反応してくれる接点がいくつかあ

るかもしれない。そのうちのいくつかの専門性を高くしていき（解像度を上げていき）、自分の独自性としていくことも重要。

四―三 アニメ研究のさまざまな観点と可能性

○津堅信之『新版アニメーション学入門』（平凡社、二〇一七年）より

【直接的研究領域】

- ・理論研究（定義・用語）
 - ・歴史研究
 - ・作品・作家研究
 - ・技術研究（作画手法・撮影技術・制作プロセス技術）
 - ・サウンド研究
 - ・観客（オーディエンス研究）
- 【間接的研究領域】
- ・心理学、産業論、カルチュラル・スタディーズなど

○小山昌宏・須川亜紀子編『アニメ研究入門 アニメを究める6つのツボ』（現代書館、二〇一三年）より

・文学理論・批評理論
・映像論

・ジェンダー論

・サウンド／ヴォイス研究

・ヒストリー（歴史）研究

・オーディエンス（視聴者―消費者）研究

・アート研究

・コンテンツ（著作・流通システム）研究

・オーディオ・ビジュアル研究

五 おわりに

作品をめぐることば

①作品そのものの価値づけや、ジャンルや歴史における位置づけの客観的提示。

②個人の受容（受け取り方）を紹介して、それを客観視した（他者に伝わる形で示した）価値の提示。

↓非日常性をおびるアート以上に、日常生活や個人の人生と結びつきやすいポップカルチャーにおいては、②のことばも重要。①も②も作品をよりよく見ること、よりよく伝えることにつながる。

春原史寛

第貳話

エヴァ

彼らにとっての

私は『シン・エヴァ』をどのように見たのか

なぜ 「私は『シン・エヴァ』を どのように見たのか」 を語る必要があるのか？

春原史寛

すべての作品との接点は、ひとりの自己のなかであっても唯一のものであって、初回と二回目、そして何度接したとしても、本人がその違いを意識していないとしても、それぞれは一回しかない体験のほうである。「私はどう見たのか」を語ることは、その一回一回の体験の特異性を見出すことでもある。その発見によって、作品が作品だけで完結せずに、どのようにリアルな自分の生活や日常や人生に働きかけてくるのか、自分をつくる要素に作品世界がどうやって加わってくるのかを知ることができる。

体験のその微細な違いはどのようなポイントによるのだろうか。例えば、『シン・エヴァ』あるいは一連の「エヴァンゲリオン」シリーズについてどの程度知っている状態で見たのか。上映期間中のどの時期に見たのか。だからの勧めで見たのか、家族や友人・知人からの直接の働きかけなのか、間接的な作品の広報やSNSなどの口コミなのか。どの映画館をなぜ選んだのか。アクセスのしやすさなのか、映像・音響の設備が整っているからなのか。その要素は無限にあり、そのどこに注目するのかによって、コンテンツと自分との関係は幾通りにも伝えることができる。

また、ポップカルチャーのコンテンツは、その個人の生活に作用するという性格上、私（わたくし）の個人的な「体験」を通じてこそ有効に語られ、批評される側面があるのではないだろうか。自己と対象との関係性（私を紹介した議論）を語り、他者がそのコンテンツに触れてみたいと感じたなら、その言葉は批評となり得る。しかしながら、その批評をより有意義に行うため

には、作品と自己（生活・日常・人生・思考・感情）との歴史・関係性を確認する必要があるのではないだろうか。それが、自分のコンテンツ体験の特異性を生み出した根拠となり、コンテンツ内容への単なる共感だけではない、コンテンツの新たな魅力の可能性を他者に伝えることにつながるのではないだろうか。

自分の生活史とコンテンツの関係性を見出すには、下記のような表を用いて、自分の人生のどんなタイミングや転換点（例えば受験や進学、引っ越し、家庭の変化）に、どのようなコンテンツの体験があり、あわせて、自分で創造すること、また、アートをはじめとした芸術文化をどのように体験してきたかを確認すると、自分にとってのあらゆる表現（見ること、つくること）の年表を書くことができる。

芸術文化学科の三年生専門科目・必修授業「芸術文化研究E 現代メディア文化論」では、ここまでの観点を踏まえて、あるコンテンツを選んで、①作品論 ②作家論 ③独自の視点からの批評 を書けるようになることを目指す。まず行うのは、作品を讀者と共有すること（ファンのみの議論を超える）、そして、作品を通読・視聴すること、作品をめぐる言葉をリサーチすること。さらに、その体験と自己との関係性を論理的に明らかにして、最後に、共感のみではない納得・発見を讀者にもたすことを学修している。

	学校 家庭	自分の 日常生活	表現すること つくること	ポップカルチャー・ コンテンツ体験	芸術文化（アート） の作品体験
小学生まで					
小学生					
中学生					
高校生					
大学生以降					

折原彩、彼女の場合

なぜエヴァンゲリオンに惹かれるのか

グロテスクな描写も多く、未知の生命体、使徒^①、エヴァンゲリオン^②、など登場する生命体は現実の理解の範疇を遥かに超える様相である。そこに登場するキャラクターたちも人間の形をしているが私たちが現実で生きる世界とはつくられていない世界、根本が全く異なっている。そうした現実の理、規格から外れた世界、生命で構成されているこの作品になぜ幅広い世代の人々が長年、魅了されているのだろうか。

まず自分がエヴァンゲリオンに惹かれ始めたのはいつだった

て、見始めたのははじまりであった。もともと興味はあったもののかつてはグロテスクなイメージにより見る事ができなかったが、今ならば多少グロテスクな描写も見ることができるようになった。最初はアニメ、旧劇^③、新劇^④を一通り見て、その世界観が理解できなかった、私の理解の範疇を超えていたという方が正しいかもしれない。ただ、二十五年も前に作られた作品だということにこんなにもエヴァのメカニックデザインがかっこいいことに魅力を感じた。一度では理解できなかったため、再び、アニメ、旧劇、新劇を見て、最新作『シン・エヴァンゲリオン^⑤』の二回目を見たところで魅了されはじめた。

『シン・エヴァンゲリオン^⑤』について

私は六月二十六日、七月二十日の二回どちらも地元の映画館に単身、見に行った。忙しい日々が続いていたためアニメ、旧劇、新劇を一通り見てから少し日が空いてしまったが、六月二十六日に初めて『シン・エヴァンゲリオン^⑤』を視聴した。先に映画を見た友人が「置いてかないでくれ」と言っていたのを聞いていたが、私も見終わって、置いてかれた感覚に似たものがあった。ただ作品の前に呆然と立ち尽くしかなかったよ

か振り返ってみる。エヴァ^⑥は気がついたときには存在は知っていた。テレビでエヴァを取り扱った番組、歌番組、パロディ等々が放送されていたためである。ただ、どんな作品なのかはわからなかった。わかるのはロボットに少年が乗るロボットアニメだということくらいしかわからなかった。今でもエヴァがどんな作品かと問われたところで答えられない。一言、二言で表すには難しい作品である。中学生の時、友人がエヴァに魅了され勧められた。しかし、興味はあったものの使徒やエヴァのグロテスクなイメージが先行してしまい、当時は見なかった。大学生になり周りの友人に教養として見るのも良いと勧められ

うな感覚があった。一度見ただけでは自分の中で上手く咀嚼できなかったため、二回目を見に行った。また映画館での上映が七月二十一日をもつて終焉を迎えるとも聞いたため終焉直前の七月二十日に見に行った。二回目のシン・エヴァを見るにあたって、前日までにアニメと新劇を見た上で臨んだ。そのためかシン・エヴァ十四年後の世界と十四年前の世界やキャラクターとの変化を鮮明に見ることができた。シン・エヴァを見て、キャラクターたちがどのように変化し、最後を迎えたのか書き出していくとキャラクターの成長や心情の変化があることに気づいた。また、それからアニメを見ると、シンジやアスカがシン・エヴァで大人になったことを改めて感じる。旧劇はどこに着地したかわからないままエンディングを迎えたと感じたが、シン・エヴァではエヴァの呪縛を終わらせてエンディングを迎えたとすることができた。

外側から内側へ

エヴァンゲリオンをほとんど知らない状態で作品を見はじめた個人的見解としては初見でシン・エヴァは理解できない。アニメ一週見ただけでは理解できない。そもそも理解できるもの

なのか疑問があるところだが、思うにエヴァンゲリオンは庵野秀明監督^⑤の世界観であり、彼の作り出した想像の世界。私たちはそれを覗き込んでいるにすぎない。一般的にエンターテインメントというのは作品であると同時に観客にどう見せるか、どんな感動やメッセージを伝えるかを考えるものが多いと思われる。つまりは外側に向けて作るという意思がある。しかし、エヴァンゲリオンにはそれがないように見える。あくまで製作陣が作りたいものを作って、見せているだけで、見る人にわかりやすく見せようなどといった外側にむけた発信は薄いような気がする。私たち視聴者はそこにある世界を覗き見ているにすぎない。こちらから近づかない限り、エヴァンゲリオンの世界の鱗片にすら触れることはない。

- 1) 使徒：テレビアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』及び、『エヴァンゲリオン新劇場版』に登場する人類と敵対する架空の生命体。
- 2) エヴァンゲリオン：汎用人型決戦兵器 人造人間エヴァンゲリオン（はんようひとがたけっせんへいきじんぞうにんげんえうあんげりおん）『新世紀エヴァンゲリオン』及び、『エヴァンゲリオン新劇場版』に登場する兵器。14歳の子供が中に乗り込み操縦する。使徒を殲滅するために開発された兵器。「エヴァ」「EVA」と略されることが多い。
- 3) エヴァ：エヴァンゲリオンの略称。
- 4) 旧劇：『新世紀エヴァンゲリオン劇場版Air(まじ)ころを、君に』のことを指す。『エヴァンゲリオン新劇場版』が二〇〇七年に公開されて以降、新劇場版に対し「旧劇」、「旧劇場版」と呼ばれる。
- 5) 新劇：『エヴァンゲリオン新劇場版』のことを指し、「新劇」や「新劇場版」と呼ばれる。『エヴァンゲリオン新劇場版』は四作品から成り、『エヴァンゲリオン新劇場版…序』、『エヴァンゲリオン新劇場版…破』、『エヴァンゲリオン新劇場版…Q』、『シン・エヴァンゲリオン劇場版Ⅲ』のことを示す。
- 6) 庵野秀明監督：アニメ作品『新世紀エヴァンゲリオン』をはじめとするエヴァシリーズの監督。

加藤ひなの、彼女の場合

【いつ】 最初 二〇二一年六月十一日

【どこで】 家の近くのムービックス

【だれと】 一人（基本的に好きな作品は一人で見たいタイプ）
【どのように見たのか】（本当に終わるのか？という疑問を持ちながら映画館に挑むような気持ちで見に行ったエヴァシリーズ①に初めて触れたのは大学一年生十九歳の頃。中学生くらいの時に姉が父の家で旧劇を見ていたときに、横を通り過ぎてなんだこの怖いアニメは！という驚いた記憶がある。確か巨大綾波②が出てきたシーンだったと思う。そして、十九歳になった時になんとなくオタクの基礎教養というか履修しなくては

いけないアニメだと思ったのでレンタル屋で借りて見た。多分、大学生が比較的に時間を自由に使える時が多いからだと思う。計三回、私はシン・エヴァンゲリオン③を見るために映画館へ足を運んだ。この三回という回数が多いのかは分からないが、私は積極的に映画館に足を運ぼうと思いいこの回数になったわけではない。まず、初回。六月十一日に地元の映画館へ行き鑑賞した。私個人ではあるが好きな作品の映画の初回というのは、情報をシャワーのように浴びる（まるで『ショーシャンクの空に』④のラストシーンのように）体験だと思っているので基本的に一人で観に行く。特にエヴァについては、エヴァ

シリーズを映画館という環境で視聴したのが二回目だったこともあるかもしれない。スクリーンに映し出される切り替わる映像を眺めているだけでその情報を受け取るだけで咀嚼は仕切れていなかった。というか、初回の感想は本当に終わってしまった……という印象だった。疲労感が凄かった。なんとなく、いや、予告やらなんやらで、本当に終わる、ということは理解しているつもりだったのだが本当の意味で理解できていなかったのだ。だから、本当にエヴァンゲリオンがある程度の伏線を綺麗に回収し、物語に蹴りをつけ、あの赤い海に戻ることがないということを理解しきれなかったのだ。だから、初回の三時間少しの間、私はああ、本当に終わってしまうのか、さようなら？本当に？と疑心暗鬼になりながらスクリーンを眺め、本当に終わってしまったって、美しい物語の終わりに対面して驚いて（そしてとても疲れて）家に着いた。所感の感想は陳腐な感想で情けないが「本当に、エヴァンゲリオンが終わってしまった」となった。その日は、運動を沢山した日のようにぐっすり眠れた。

二回目

二回目は確か、立川シネマシティの激音上映で鑑賞した記憶

がある。立川シネマシティの激音上映の音は音を聞くのではなく音を肌でビリビリと感じるまるでライブのような体験ができるので好きな映画が上映していたらぜひ足を運んで欲しい。一回目は、受動的な体験しかできなかったシン・エヴァをちゃんと咀嚼しよう！と構えて映画館へ向かった。テレビ版やら旧劇場版のことを考えながら鑑賞した。エヴァンゲリオンで、特に私はアスカが好きなので惣流⑤と式波⑥のことを考えながら見ていた。（ちなみに私は惣流の方が好き。人間臭くて。式波はかっこいいなと思う）あと、電車のシーンは特に集中して観た。作品内で、メタファーとして電車や乗り物を用いる作品は多い。特にこのエヴァンゲリオンにおける電車というモチーフは特徴的だろう。目的の地が未確定な電車に乗って、登場人物たちは自分の感情を吐露していく。私はエヴァが終わるといことで、きっと彼らはこの電車から降りるのだろう、降りるといことが大人になるという意味かもしれないとなんとなく予想していた。

そして、本当に碇シンジは電車から降り、マリと共に未来に向かうかのように階段を駆け上がったのだった。二回目は初回よりもいわゆるエヴァンゲリオンがどのようなことを描写しているのかということをしつかりと理解できるようにまじ

まじと鑑賞した。一回目よりかは作品の内容を真摯に捉えようとして見たという鑑賞スタイルであったと思う。

三回目

友人からもうシン・エヴァの放映が終わるということで義務的に劇場へ足を運んだ。劇場公開が終わるならあともう一回くらは行かなければと思ったからだ。初回と同じ地元の映画館で、放映が終わる二日前だったのでコロナ禍にも関わらず席は満席だった。三回目、三回目の感想はもう「私をおいて行かないでくれ」という感情しかなかった。三回も同じ映像を観たからかもしれないがそう思ってしまったのだ。多分私は、碇シンジはずっと子供のままでいて欲しかったし碇ゲンドウにはあの理不尽さで自分のために世界を利用する狡い狡猾な大人でいて

欲しかった。そして、ラストのアスカの肉体が精神に伴った(おそらく二十八歳前後)になった時、悲しかったのだ。置いて行かないでくれ、と。エヴァンゲリオンは大人になりきれなかった大人を描いていて、みんなが大人になってしまったら私はどうすればいいのだと途方に暮れてしまった。多くの人は、なんとなくエヴァが完結するのならこうなるのだろうという感情と庵野監督²ならまた何かやってくれるのではないかという気持ちで後者だったのだと実感した。

次から次へ登場人物は大人になり、電車から降りた。そうして私は電車の降り方すら分かっていないのかもしれない。私は三回目にして、もうエヴァは終劇したのだという事実を改めて理解し勝手に悲しくなったのだった。

1) エヴァシリーズ：テレビアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』、アニメ映画『新世紀エヴァンゲリオン劇場版』(以下、君に)、『エヴァンゲリオン新劇場版』のアニメシリーズの総称。

2) 綾波：綾波レイ(あやなみれい) テレビアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』及び、『エヴァンゲリオン新劇場版』に登場するキャラクター。エヴァンゲリオン零号機専属パイロット。

3) シン・エヴァンゲリオン：二〇二一年公開のアニメーション映画『シン・エヴァンゲリオン劇場版Ⅱ』。アニメーション作品『エヴァンゲリオン新劇場版』の完結編。

4) 『ジョーシヤンクの空に』：一九九四年に公開されたアメリカ映画。

5) 惣流：惣流・アスカ・ラングレー(そうりゅう・あすか・らんぐれ) テレビアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』に登場するキャラクター。エヴァンゲリオン式号機パイロット。

6) 式波：式波・アスカ・ラングレー(しきなみ・あすか・らんぐれ) 『エヴァンゲリオン新劇場版』に登場するキャラクター。テレビアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』の惣流・アスカ・ラングレーと同様のキャラクターデザイン。

7) 庵野監督：庵野秀明(あんのひであき) テレビアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』及び、『エヴァンゲリオン新劇場版』の監督。

山口衣織、彼女の場合

テープレコードが巻き戻されるように

古びた祖父母の家の一角の薄暗い部屋。

その部屋にあるテレビからは古いアニメが映し出されていて、バスケットボールの床に打ち付けられる音が流れている。

側のベッドに寝転んでいる父がそのテレビを眺めている。

父はそのアニメを再生しては巻き戻している。

再生、巻き戻し。再生、巻き戻し。

バスケットボールの音が部屋に鳴り響く。

日差しが強いからか、窓の向こうは色褪せている。

季節は夏だっただろうか。

わたしはそれらを俯瞰している。

バスケットボールの音は、未だにわたしの頭の中でふとした瞬間鳴り響く。実際にこの時間を体験したかは定かではなくて、いつだってこの風景の映像は白昼夢のようなまどろみでわたしの心に現れてくる。これらは所謂原風景というものののだろうか。

一つ、この曖昧なまどろみに確信をもっていることがある。白昼夢のテレビから流れていたもの。それは新世紀エヴァンゲリオンだった。鳴り響くバスケットボールの音は、トウジがバスケットボールをするシーン。

今日までわたしは、繰り返し繰り返し、そのバスケットボールのシーンをリフレインさせてきた。

テープレコードが何度も巻き戻されるように、ずっと。ずっと。

エヴァと共に育った人間の話

さてここからシン・エヴァンゲリオンのお話をしていくわけだが、約二十五年半の中で飽きるほどエヴァンゲリオンについての言説や解釈は生まれているし頭の良い人たちによって議論されてきたはずである。だから私はエヴァンゲリオンについての言説や解釈を、今更ここで書くとは思わない。私はあくまでも個人的な、シンジやレイと設定上は同い年の人間としての、そしてエヴァを親で育った人間としての、個人的な話をしようと思う。

まずは私がなぜシンエヴァを観るに至ったかを話させてもらいたい。それはもう遡ること二十年前になるだろう。冒頭に書いたように、私の原風景にはエヴァがいる。理由は単純明快、父親がエヴァを好きだったからである。物心がついた時にはエヴァが側にあって、そこから私のオタク人生はスタートしてし

まったのだろう。小学生の頃は父親の部屋でエヴァクロニクル^①や漫画版エヴァンゲリオンを読み漁り、アメトークのエヴァンゲリオン芸人^②を家族で何度も観ていた。今思うと本当に嫌な小学生であるし、拗らせた小学生である。

そういつたエヴァに付随するものに対するおぼろげな記憶はいくつかあるのだけれど、「エヴァを観た」とはっきりと言えるのは『エヴァンゲリオン新劇場版…Q』になる。『Q』が公開された二〇一二年冬、私は小学六年生で東京の武蔵野市に住んでいた。その頃の私は、というか私たち家族は、春に引っ越しを控えていて、休日は引っ越し先の群馬と東京を往復するなどをしていたのだけれど、その合間をぬって父親が『Q』に連れて行ってくれた。練馬にあるTジョイSEIBU大泉という映画館だった。『序』『破』はスクリーンで観た記憶がないので、多分父親のもっているDVDで事前に観るなりして『Q』に行っただと思う。『Q』を観た時は、小学生ということもあったのだからけれど、正直とにかく何にもわからなかった。なけなしのお小遣いをもって本屋に向かい解説本を買ったりするくらいには理解しようとしていたし、なんならもう一回劇場に足を運んだ。けれど何にもわからなかった。

一つ覚えていることがある。『Q』を観た帰り道、車の中で

父親が「次のが公開されるのは衣織が中学卒業する頃になっているかもね」なんて冗談を言っていた。外では踏切が鳴っていて、少し煩かった。

私はもう間も無く群馬へと引つ越し、シンジやレイたちと同じように二〇一五年に中学二年生になり、十四歳を迎えた。だからといって特別なことが起きたわけでもないし、使徒なんてやってくるはずもなくて、彼らがどこかの世界で命を賭して戦っている時、私はただただ部活に精を出していた。

そして中学を卒業しても、高校を卒業しても、エヴァの続編は公開されなかった。

『Q』を観た六年後、私は大学入學を機に東京へ戻ってきてしまったし、昔住んでいた武蔵野市に割と近い所で生きている。小・中・高と、「わからない」という感情になるにも関わらずそれでも何度もアニメや旧劇①・新劇②を、「エヴァ」を観ていた。大学一年の冬、Netflixで久しぶりにエヴァのアニメ版を観て、私の中でエヴァに対する何かが変わった。正直、エヴァをしっかり受け止めることができるようになったのはこの時からだったと思う。それは受け止める、というよりも「エヴァ」が私の中で確かな質量を持ったものになった、と言うべきかもしれない。ああきつとこれは、私は、ただアニメを観て

いた。

その次の日、ついに『シンエヴァ』の本予告がアップロードされた。宇多田ヒカルの歌声を聴きながら、ああ本当に終わってしまうのだなと思った。終わってしまうくらいならば『Q』のわからなさを抱えたまま漂っていたい、と思ったりもしたがやはり終わりを見届けたいという気持ちが勝った。ついでに、この予告を初めて観た時に抱いた感想は「日向と青葉のグータッチ③」だった。アニメ版から変わらずにそこに座っていてくれた二人が、旧劇で銃を持って応戦していた二人が、グータッチをするくらいなんだからエヴァはいよいよ終わってしまうんだらうな、と、そこで納得した。

一回目のシンエヴァ

ここからシンエヴァの話をしていこうと思う。長らく私の20年間の日記を書いてしまっただけで申し訳ない。『序』『破』を観に行った友人に誘われ、公開翌日の三月九日のお昼時、府中のTOHOシネマズへ足を運んだ。いつもはガラガラの府中の映画館に見たこともないくらいの人が集まっている様子を見ても、飲み物をもって劇場の椅子に座っても、「これからシンエヴァ

いるのではないんだ、と思った。エヴァを観るということを通して、私のひどく個人的なところに、なにかが降り積もっている。それはもう何年も。

二〇二〇年十二月、大学二年生の冬。『序』『破』『Q』が映画館で上映されることがしれっと発表されていた。まさかスクリーンで観ることができると思っていなかったのひどく興奮した気持ちでチケットを取った。『序』『破』は友人と府中のTOHOシネマズで観た。初めてスクリーンで観る『序』と『破』に、ただただ純粹にオタクとして感動した。『Q』は友人と予定が合わなかったため行くのをめんどくさがっていた。しかしふと、七年前に父親と行ったあの映画館で今、『Q』を観なければいけない、と思い立ち、最終日の十二月二十四日夜な夜な電車で大泉学園駅まで行った。七年間記憶の中だけに存在していた映画館は記憶の中と変わらない姿で目の前にあって、「ならば、全てのエヴァンゲリオン」と書かれた『シンエヴァ』のポスターが貼ってあった。こじんまりとしたシアターに観客は数人しかなくて、そうか世間はクリスマスだったかなんて思いながら席に座った。相変わらず『Q』はわからなかったけれど何だかそれでもすごく心地が良くて、人がいないのいいことに『桜流し』④を歌いながら駅までの道のりを歩

を観る」という実感は湧かなかった。

そしてなんとその実感は、東映のロゴ越しにマリの鼻声を聴いても、本編が始まって、そして『One Last Kiss』⑤が流れても得られることはなく、気づいたら真っ白な画面にマティスEB⑥で「終劇」という二文字が映し出されていた。心地の良いような、悪いような、何とも言えない時間。なにか大きいものに包まれて、ゆっくりと息を止めているような感触。わたしは「やはりなんにもわからなかった」と思いながらも、それでいいような気もしていた。ふつふつと浮かんてくる様々な感情や考えに名前をつけられないまま、オタク特有の「無意識の行動」によりパンフレットだけは購入し劇場を後にした。私も、一緒にいた友人も、帰り道はぼつぼつと喋ることしかできず、「とりあえず家に帰ってパンフを読もう」と言っただけで寄り道もせず駅でお別れをした。

しかし家に帰ってもただ天井を見つめることしかできず、パンフレットをしっかりと読むことができたのはその数日後のことであった。パンフレットについては購入していない人もいるだろうし、ネタバレになる可能性もあるので深いところまでは言及しないが、声優さんのインタビューで普通に泣いた。エヴァンゲリオンというコンテンツがいつか本当の意味で終わって

も、少なくともこの人たちの中では最後の最後までキャラクターたちが生きているのだろうと思った。

私にとっては、もうそれだけで十分だった。

二回目のシンエヴァ

気づけばシンエヴァを観てから四ヶ月が経ち、季節は夏、七月になっていた。七月十一日、私は二回目のシンエヴァを観ることになる。なぜ四ヶ月も経った七月十一日に二回目を見に行ったかというのは私の性格ゆえと素晴らしい友人のおかげである。後回し癖と衝動性を兼ねている私の性格と、そのときの状況、そしてその友人の行動、この三位一体がピッタリと「二回目のシンエヴァを観る」ということに導いてくれたのだ。ちなみにその友人というのは度々この文章中に出てくる『序』『破』『シンエヴァ』を観に行った友人と同一人物である。七月七日、その友人がエヴァのファイナル舞台挨拶に当たったということを知った。私はそんなものが開催されることをその日まで知らなかったためだおめでとうとお祝いしていたら、その友人は舞台挨拶の同時上映があること、その上映が行われるという近場の映画館、加えてその予約サイトのリンクと予約開始時間ま

で教えてくれた。しかも運よく予約開始時間がその会話の2時間後だった。そこまで教えてくれた彼のおかげで「あとは日付変わってサイトに行くだけ」という状況が生み出され、その状況は私の後回し癖を解消するとともに私の衝動性にうまくフィットした。私はその後無事チケット競争に勝ち、舞台挨拶の上映と共に二回目のシンエヴァを観に行くことが決まった。

私にとってこの七月十一日に観たシンエヴァは、特別なものになった。どう言っても陳腐な表現になってしまふけれど、ただただ、特別だった。

一回目のシンエヴァを観た三月からこの七月までの間、ずっと私の中でいろんなことがぐるぐるとしていて、めまぐるしく変わっていった。あまりにも個人的な話なので詳しくは割愛するのだけれど、いろんなことを考えて、いろんな人と話して、目まぐるしく変化する私に、私自身ですら追いつけないような時期だった。「だから」という接続詞で接続するにはあまりにも話が飛躍しているし書くべき事項がたくさんあるのだがそれらはもう行間に込めさせてもらうとして、だから、私にとってこの日に観たシンエヴァは特別なものになったのだと思うし、だからよくわからないけれど観ている途中で泣いてしまったのだと思う。何故泣いてしまったのかを言語化することはまだ

にうまくできないし、してしまったら少しつまらないような気がする。これからもそっと抱えていく、余白のようなもの。ただ一つ言うならば、私が泣くきっかけになったシーンというのはシンジがヴンダーの鍵を初号機に突き刺そうとした瞬間、ユイさんが出てきてシンジを守ったシーンだった。

また個人的な話になってしまいいし申し訳ないが、このシンエヴァを観る三週間くらい前だろうか、私は二十年間生きてきて初めて、母親に腹を割っている人なことを話した。その時の私とにかく情けないくらいに泣いていて、聞くに耐えないだろう鳴咽混じりでしどろもどろにスマホの電話口に向かって母親に話していた。二十歳の人間があり得ないくらいに泣きながら支離滅裂に話す様子は側から見れば異常そのものだったに違いはないが、母親はただただ頷いてくれていた。「弱くてごめんね」と私が言ったら母親はむしろ「そんなに話してくれるなんて嬉しいよ」と返してくれて、「大人になったんだね」と言っていた。私の中にあったそういう事象が、目の前のシンエヴァと、昔から見ていたエヴァと、繋がって、質量をもった何かになった。泣いてしまったのは物語に対してではなく、きつとその「繋がって生まれた何か」に対してなのだと思う。この日私は『シン・エヴァンゲリオン劇場版Ⅲ』を観たんじゃなくて、シンエヴァ

アという、エヴァンゲリオンという、そしてそこに生きる彼女らという、「存在」に出会っていたのだと思う。もしかしたらそれは結果ではなく、私の中で無意識に計画されていたのかもしれないし、運良くそうなるように導かれたのかもしれない。

存在としてのエヴァ

私はこの七月十一日のシンエヴァを経て、エヴァを理解しようとしてエヴァを観ることが少なくなった。ここでの「理解」はエヴァという物語を物語として完全に理解するということで、「解釈しよう」とか「この伏線はここに繋がるのか」などということを考えながら観ることが少なくなったということである。ただただフラットに、エヴァンゲリオンという存在と私を対峙させるために、私はエヴァを「観る」という行為を選択する。この「観る」というのはアニメや映画などの他作品を「観る」という行為とは私の中で明確に違うものである。

もちろんエヴァの物語は面白くて（面白いの四文字でまとめられるようなものでもないが）大好きだし、物語としてのエヴァも私の中にある。しかしそれとは別に、彼ら彼女らが、彼ら

彼女が生きる世界そのものが、私の中にあって、ずつと降り積もっている。ただただエヴァは存在であって、私はその存在にふと肉薄する。エヴァはいつだってそこにいて、ふとした瞬間に日々刻々と変化する私の血肉や意識に呼応する。私にとってはこれが、エヴァを観るということなのだと思う。ここでの「エヴァ」はアニメシリーズも漫画も、旧劇も新劇も、全て含んだそれこそ「全てのエヴァンゲリオン」なのだけれど、シンエヴァはこの核であるし、これら全てを柔らかに包む膜でもある。

個人的には「存在」としてのエヴァは新劇が多くを占めているし、アニメのエヴァはあまりにも強烈な「物語」だと思っ

ている。二者に優劣も良し悪しもない。けれど、オタク心としては新劇よりアニメをお勧めしたくなってしまう。一方で新劇特にシンエヴァは、私のひどく個人的なところ、私そのものに沈殿してしまっていて、人に勧めるとかそれこそ二次創作するとかができなくなっている。十四歳の自分とかオタクとしての自分はアニメエヴァにいたけれど、いつだって今の自分、私という存在はシンエヴァにいる。私にとってエヴァはもう「好きなアニメ」なんかではなく、私という個人の奥底に満ちている「存在」なのだ。私のエヴァはシンエヴァによって終わったのではなく、むしろシンエヴァによって始まり、質量をもった存在に為ったのである。

1) エヴァクロニクル: GAINAX総監修・ソニー・マガジンス発行の『新世紀エヴァンゲリオン』の分冊百科。エヴァンゲリオンを七種類のコンテンツに分類しビジュアルとテキストで説明した、まさにエヴァンゲリオンの「クロニクル」である。

2) アメトークのエヴァンゲリオン芸人: テレビ朝日による番組『アメトーク』にて二〇〇八年四月二十四日に放映されたエヴァンゲリオン芸人。くりいむしゅーの有田哲平やオリエンタルラジオ中田敦彦らが出演していた。

3) 旧劇: 『新世紀エヴァンゲリオン劇場版』を「まごころを、君に」の通称。「新劇場版」シリーズと区別して「旧劇」と呼ばれる。

4) 新劇: 『エヴァンゲリオン新劇場版』シリーズの通称。

5) 桜流し: 『エヴァンゲリオン新劇場版: Q』の主題歌として宇多田ヒカルが二〇一二年に発表した楽曲。

6) One Last Kiss: 『シン・エヴァンゲリオン』の主題歌として宇多田ヒカルが二〇二一年に発表した楽曲。

7) マティスEB: アニメ『新世紀エヴァンゲリオン』のサブタイトルで使用され、以後エヴァンゲリオンシリーズで度々使用されている明朝体フォントの名前。通称「エヴァフォント」。

春原史寛、彼の場合

『シン・エヴァ』を映画館で見たのは、三月八日の公開開始から一週間ほど経った、三月十六日十二時五十分から、TOHOシネマズ立川立飛にて。二回目は四月九日十二時五十分から、シネマシティ立川にて。三回目は七月七日十四時二十分から、グランドシネマサンシャイン池袋にて。それから、手元の記録がなくなってしまったのだが、七月に新宿バルト9にて。すべて単独で。座席の位置はさまざまで、前方や後方、中央や左右、また、シネマサンシャイン池袋では、最前列の仰向けに臥して鑑賞できるシートなど、作品の受け取り方がどう変わるかも知りたいと考えた。

ところで、七月七日の午後にグランドシネマサンシャイン池袋で見た、その同日の午前中には、新宿のバルト9で、『シン・エヴァ』と重なる時期に劇場公開されていた、アニメーション映画『少女☆歌劇レヴュー・スタァライト』①を見ていた。『シン・エヴァ』の冒頭では、パリのエッフェル塔が非常に印象的な描かれ方をされる。『スタァライト』では、東京タワーが作中のキャラクターの約束や運命を示すモチーフとして、これもまた鮮明なイメージで描かれる。ランドマークとして現実の世界に堂々たる強さを持つ塔が、フィクションの作中に登場すること、私たちが得られるフィクションとリアルがつながれたら、その両者の違いを改めて意識したりするような感覚がある。東京タワーとエッフェル塔、その二つの塔を軸に、二つの作品を一日のうちに見比べて見たかった。

『スタァライト』においては、現実の私たちがまさにいまこの瞬間すでに、あらゆるそれぞれの「舞台」の上にいるということを実感させてくれ、ことさらにあからさまに勇気づけたり力づけたりはしないけれど、でも、そのこと自体が肯定されるような。そこにおいてはフィクションである作品世界は、リアルの生活に伴走してくれるような感覚。「華恋」②がこの同時にオーディションを受けようとして、多分彼女も見ているかも

所感として、フィクション、物語というものが、人によって生み出されているという至極当然のことを改めて実感する作品であった。人はフィクションという作品世界をつくりだし、その世界に深く入り込み、しかしやがて現実に戻ってくることもできるということ。どこまでも強固で長大な世界をつくり出すことができ、それが社会にも広く波及し得ること。その世界が、実は作者のごく小さな私的世界から生み出されたり、人としての揺れ動きが作品世界の成り行きにつながったりすることもあること。作品世界を意識して終えるということは、作り手によって行われるということ。

知らない、その同じ東京タワーが見える映画館でこの作品を見なくなるような、そんなリアルな私に対する促しのある物語。その後、『スタァライト』は、私の日常を液体として浸食して、いまは気体としていつも無意識にここにあるような感覚にまでなっている。

一方で、『シン・エヴァ』のエッフェル塔は、同じ地球上の異なる時間軸や世界線にあるにせよ、どこか遠い。いや地理的には東京からは遠いだけけれど。あの作中のエッフェル塔に向けて、現実のこの世界が至ったのかも知れないけれど、そこからいまこの現実には戻って来れないような。私にとつてはやはり『エヴァ』は、フィクションの側に突き詰めきった、どこまでも異物としてこの日常にある物語なのだと思う。でも、その世界が閉じられた、『シン・エヴァ』のラストのあの駅の光景は、終わりだからこそ、もう一度「こちら側」に戻ってこれるような余韻がある。

『エヴァ』に最初に出会ったのはテレビアニメーション版で、私は高校生だった。そして新劇場版が完結したいま、自分の家庭を持ち、父親にもなっているという大きな変化がある。当然ながら、キャラクターたちの捉え方も変わってくる。いや、そもそも彼ら自身も物語の展開の内側で変化しているし、さらに

は、世界の設定の変化、制作者や声優達の身体・精神の変化など、作品の外部的な要素でも変化しているはずである。二十五年という長いスパンで展開した作品だからこそその受容の仕方だと思ふ。

『エヴァ』は、旧劇の時代から私にとって、そもそも深いトゲの多い固体の塊であり、つまりは異物であり、それを、日常生活のなかに流れ込み、溶け込む液体のように味わうことはできないままだった。だから、気体である空気のように、見えなくなって私自身に内面化されない作品のままできたように思う。これまでも、新劇場版の序・破・Qを、ネット配信でテレビやPCで、生活空間で流して何かをするというような体験の仕方はしてこなかった。いや、そういう見方ができなかった。この作品を見るときは、どうしても、取りかかろうとして向かい合つて、という風にしか、触れようとは思えなかった。『シン・エヴァ』も同様で、ネット配信が始まって、流しながら仕事をしようとは思わなかった。この作品に対しては、どうしても向かい合うというかたちでなければ見ることができない。

テレビアニメシリーズ全二十六話が一九九五年十月から翌年三月にかけて放映されていたとき、私は、長野県の高校二年生だったが、おそらくその時期には見えていない。長野において本

作は、地方放送局である信越放送（SBC）で、一九九七年二月十五日から八月十六日にかけて毎週土曜日の十八時から十八時三十分放映されていたようである。当時の長野のローカル放送では、首都圏他で放映されていたアニメ作品をリアルタイムでは見ることは、まだできなかった。その後、私は一九九七年の四月からは茨城県の大学に進学しており、放送されているということは知っていたかもしれないが、おそらくこのタイミングでは見ることができていない。

一九九七年七月公開の『新世紀エヴァンゲリオン劇場版A』まごころを、君に』は、確か、大学一年の夏休みに、帰省した長野市の映画館で一人で見たはずである。その時点からテレビシリーズを見たはずだが、それが何らかの放送だったのか、レンタルビデオだったのかははっきりしない。作中で、「第2新東京市」が長野県の松本市であるという設定や、長野市のかつて大本営があった松代町の地名や眺望も登場するという点で、なんだか気になったということがあった。さらに箱根が「第3新東京市」であるように、そもそも現実の都市や地域がアニメ作品に登場することもあるんだということを初めて知り、それが面白いと感じたのが本作だったかも知れない。

それでも、やはり気になっていた作品だったのだろう。下宿

の大学の寮と、その後に移ったアパートの自室に、自分でどこかで買ったエヴァのグッズがあった光景は覚えている。ネルフ③の立ち入り禁止パネルを模した、自室の扉にかけるようなプレートだったような。進学で東京に近いところ来たということで、秋葉原に出掛けて、そのアニメ関連商品専門店アニメイトで買ったのだったろうか。

話が変わるが、アニメイトの長野店ができたの、このころ、一九九六年か九七年あたりではなかったか。それよりもっと前からあった店なのだが、私の母方の家は書店を経営していて、その書店の、長野駅から善光寺に向かう道沿いにあった一つの店舗が「アニメイト」という名前で、マンガやアニメグッズなどを販売する小さな店だった。高校生、それから大学生になつてからも、単発で何度か店番のアルバイトをしたことを思い出す。『エヴァ』のグッズも、この店先に並んでいたように思う。

このころ、『赤ずきんチャチャ』一九九四年一月～一九九五年六月）、『セイバーマリオネットJ』（一九九六年十月～一九九七年三月）、『機動戦艦ナデシコ』（一九九六年十月～一九九七年三月）といったテレビ・アニメーション作品をリアルタイムで見たり（といっても長野なので時期はもっと遅れているが）、そのレーザーディスク④を買ったり、ライトノベル

を読んだり、あるいはアニメ雑誌を買いはじめたりと、なんとなくポップカルチャーという表現の物語世界が心地よく感じていた時期で、店番も喜んで引き受けていた。当時は高校の美術部に所属していて油彩画を描いていて、ポップカルチャーを含めた、何らかの表現の作り手を目指したいのが本音であった。ただ、現実的な自分の進路としては、もっと上手い人たちが周囲にもたくさんいたということを理由に、それでも表現には関わってみたいということで、美術館学芸員を目指して、美術史を選んで大学には進学した。

大学で、芸術学専攻の先輩と、第二外国語の話で、ドイツ語について雑談していたときに、『エヴァ』の何に自分たちが反応したのかという話題になった記憶がある。その後、ドイツ語を履修したのだが、それは『エヴァ』の影響だったかも知れない。ただ、学生の間はそれほど熱心にポップカルチャーに触れることはなく、自分にとって必然的な表現だと思ひ直したのは、卒業後に仕事をしはじめて、忙殺されるようになってからである。

最初に就職した美術館の学芸員を退職して、大学院修士課程に入り直した年である二〇〇七年の九月から順次公開されてきた新劇場版については、私は熱心には見えてきておらず、ネット

配信で見られるようになってから視聴したような覚えがある。完結するとわかった『シン・エヴァ』を何度も見てしまったのは、やはりその世界が終わるから、つまりは現実との接点が生じるからで、序・破・Qにじっくりと取り組みなかったのは、現実から離れて行き尽くしたところの物語だったからかも知れない。

つまり私は、リアルに生きる私に還元されるフィクションの世界に親しみを感ずるという作品の見方をしているということなのだろうか。ということは、だからこそ、その遠くに確固としてあるごっことしたものとしての存在感こそが、私にとつての『エヴァ』の意義なのだろう。

1) アニメーション映画『少女☆歌劇レヴュースタァライト』…二〇二一年公開のアニメーション映画。『少女☆歌劇レヴュースタァライト』は二〇一七年にプロジェクトがスタートしたミュージカルとアニメのメディアミックス作品で舞台俳優とアニメ声優が同一キャストで演じられるのが特徴。本作はアニメシリーズの劇場版。

2) 華恋…愛城華恋(あいじょうかれん)『少女☆歌劇レヴュースタァライト』の主人公。アニメ版声優、ミュージカル版俳優ともに小山百代が演じている。

3) 「第2新東京市」…テレビアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』に登場する架空の首都。作中では東京が壊滅したため、暫定的な首都として長野県松本市を第2新東京市と改称して遷都した。

4) 「第3新東京市」…テレビアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』及び、『エヴァンゲリオン新劇場版』に登場する架空の都市。作中では使徒迎撃専用要塞都市として芦ノ湖北岸の神奈川県足柄下郡箱根町仙石原に遷都される。

5) ネルフ…正式名称は国際連合直属非公開組織 特務機関ZWEI(ネルフ)。テレビアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』及び、『エヴァンゲリオン新劇場版』に登場する使徒殲滅を任務とする架空の組織。作中では日本国の第3新東京市、芦ノ湖北湖畔地下に存在する。

6) …レーザーディスク…直径三十七センチのディスクに画面で最大二時間の映像を記録することができる。

アンケート、その答え

第参話

あなたはどのように

『シン・エヴァンゲリオン劇場版』

を見ましたか？

——美大生の視聴行動と意識調査

調査対象者 武蔵野美術大学芸術文化学科2021年度授業「ミゼオロジー入門」(主に一年生対象)、
「芸術文化研究Ⅱ 現代メディア文化論」(主に三年生対象) 履修学生 (合計約百名、回答への協力は任意)

回答者数 18名

実施期間 2021年9月3日～8日

実施方法 無記名方式/ウェブアンケート(Google Forms)

Q.2

観た方は、なぜ、どんなきっかけで観ましたか？

回答9名

- ・エヴァンゲリオンを好きな先生や友人から勧められたため。またテレビシリーズから視聴してその魅力に惹きつけられたため。
- ・中高の友人に何度も勧められたため。
- ・小学校時代にアニメを見て、コミックを見てハマったから。
- ・過去作を見たので。
- ・アニメ版の新世紀エヴァンゲリオンから庵野監督のエヴァという作品が好きだったから。
- ・詳しくはないけどエヴァが好き、これまで映画が公開されれば映画館で見てきたから。
- ・一つの作品(時代)が終わる、ということを劇場で、自身の目で見届けたかったからです。
- ・十年間待ち続けていたから。
- ・全シリーズ制覇しており、集大成の本作をどうしても締め括りとして見なければならなかったから。

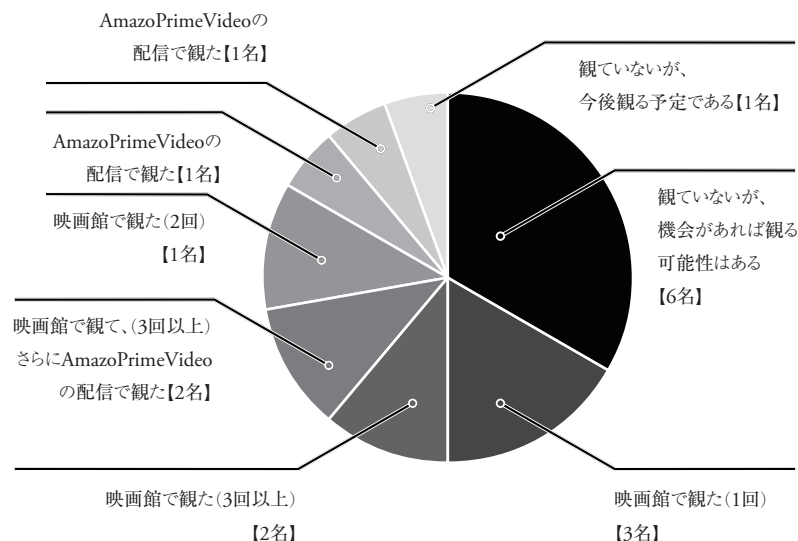
Q.1

あなたは

『シン・エヴァンゲリオン劇場版』(2021年3月公開映画)

を観ましたか？

回答18名



映画館で観て(1回)、さらにAmazoPrimeVideoの配信で観た【0名】

映画館で観て(2回)、さらにAmazoPrimeVideoの配信で観た【0名】

Q.3 観ていない方は、その理由は何ですか？

(過去の『エヴァ』関連の作品を見た経験のある方は、どの程度触れてきたか、知っているかも可能であれば教えてください。)

回答九名

- ・単純に興味が無いから。
- ・みたいけどダラダラしてたら観る機会を失った。
- ・前作を見られていないため。
- ・エヴァンゲリオンを漫画以外でしっかりと見たことがないから。
- ・残酷なシーンが個人的に苦手なので。
- ・エヴァンゲリオンは名前とキャラクターしか知らないです。
- ・全く知らないし、シンジくんを今までケンジくんだと思っていた。
- ・Amazon prime Video の庵野秀明さんのドキュメンタリーと松本人志さんとの対談は拝見したり、エヴァンゲリオンが好きな友人からあらすじなどは聞いているのですが、まだこれらの情報量で満足してしまっているため。
- ・シリーズものは最初から見なければいけない気がして、気が追いつかない。
- ・過去の作品をほとんど見ていないため

Q.4 観ていない方は、本作をめぐる社会状況(流行や評価、広報、関連番組等の放映など)について、どのように感じますか？

回答九名

- ・『鬼滅の刃』や『呪術廻戦』のように一時大きなブームを巻き起こしていく作品とは異なり、いくつかある作品みな一定の人氣が衰えない、息の長い作品だと思いました。また主題歌である『残酷な天使のテーゼ』はカラオケで歌われるアニメソングランキングで常に上位にランクインしており、作品そのものを知らなくても歌は知っているという人も含めれば社会的にかなり知られているアニメであると感じます。
- ・『鬼滅の刃』よりは盛り上がってなかったけど、そこそこ盛り上がったなと思う。Twitterでも大反響だった。
- ・ネタバレを防ぐために出来るだけ見ないようにしていたのであまり分からない。
- ・映像、音楽、原作のクオリティに対するメディアの取り上げ方は下手に誇張や神聖化しているわけではないのでとてもいいと思う。
- ・社会を嘘かす力は感じました。至る所に広告があって、周りの人たちも見た人が多かったので、何がそんなに人々を惹きつけるのか興味は湧きました。
- ・とても盛り上がっていて、国民のほぼ多数が知っているかのように感じている。
- ・庵野秀明さんのシン・シリーズは、見てみたいという想いと同時に、もう新規映画でこけたくないのかな？みたいな気持ちもあります。
- ・きっと面白いのだろうと思う。一方で、周囲には観ていない人も多く、シリーズのファンの盛り上がり過ぎなのではないか、と感じてしまうこともある。
- ・多くのメディアで取り上げられていたので、大きな影響を与える作品なのだと思います。

Q.6

観た方は、作品や作品をとりまく状況について、 どんな感想を持ちましたか？

(その後の自分の生活への影響もあれば書いてください。)

回答7名

最後のエヴァンゲリオンなので比較的にハッピーエンドに集結した気がしてほっとしたが、YouTube上に考察動画が沢山あがっているように理解するのが難しい内容もあった。見た後は一週間ほど余韻ではかの物事に集中できなかった。友人が

テレビシリーズを見てアニメと云えるのか、アニメを超えているように感じた。またテレビシリーズ公開当時の他のアニメの演出とどう違うのか気になった。そのアニメを見ていた子どもたちが大人になるまで完結を待っていたこと、その長い時間がとても恐ろしく思えた。当時リアルタイムで観ていた人の感覚を知りたいと思った。また視聴後、庵野監督の生涯とエヴァの関係や庵野監督が影響されたものとエヴァの関係について気になり記事やドキュメンタリーを見るようになった。

既に二回ほど見に行っておりその心境がわからなかったが、初めて「映画を全て理解したい」と思って複数回見た。

ネタバレなどありでお話致しますのでご注意を。

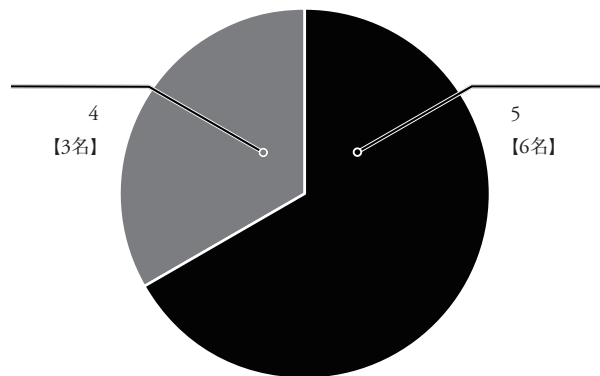
この作品を観た時 最初に思ったことは、これは庵野監督によりエヴァという作品の死を与えられたのだと思います。観たように今回のシン・エヴァンゲリオンとても綺麗に完結しているように思います。二十五年間作中でもループしていたように、ずっと追い続けてきたファンに作品を完結させることで、私達がエヴァという作品の完結、つまり死を向き合い、シンジくんのように決断しよう、そう言われているような気がしました。ですがやはり最初は完結した実感が湧かず、放心状態が続いていた気がします。

Q.5

観た方は、本作の評価はどうか？

(5段階評価／1:低評価～5:高評価)

回答9名



1[0名]
2[0名]
3[0名]

作品を取り巻く状況に関しては、新しいファンが増えたというのが最初の印象です。初期のエヴァとしては周りにいるファンはみな原作であるアニメ版のエヴァを当然知った状態でシンエヴァを観賞していると思っていたのですが、エヴァという作品がもつ知名度や完結というキャッチコピーにつられて、エヴァという作品の初見がシンエヴァである新しいファンが増え、今までのコアな人に刺さり有名だったエヴァではなく、多くの人が名前だけは知っていて、エヴァを認知しているのだと実感しました。日常生活の変化は、最初、初めて観終わった後は最後の真っ白な画面に終劇と書かれたシーンが頭から離れず、絶えるように貞本先生による漫画版のエヴァを読み直すという行為が増えていました。

報をシャットアウトしていました。しかし、どこかモヤモヤした感覚を感じていました。それから四ヶ月たち、ラストランが迫った七月のある日にYouTubeでシンエヴァンゲリオンのオールナイトニッポンの再放送をふと聞いて何故か、自分はただエヴァから逃げていただけかも知れない。最後にもう一回だけ観なければ！と悟りました。その翌日にシンバージョンで二回目のシンエヴァを観ました。映画館をでた帰路の途中の清々しさを今でも憶えています。

ち ようど精神が参っていたところで、碇親子の関係の清算や、その他のキャラクターの人間ドラマに心を打たれました。

見

終わった当初は、映像が綺麗だったけど訳がわからないという感想。本作は人間の成長や関係にフォーカスして描いているなと思った。エヴァに使われた宇多田ヒカルの曲がやっぱり素敵で、観賞後よく聞くようになった。

ア

二メ放映当時には生まれていなかった自分としてはまず第一に、生きている時にエヴァをリアルタイム（劇場）で観ることができて良かったなと思いました。加えて、自分はエヴァが物凄く好きだというわけではなかったので物語が完結しても特別名残惜しさや哀しい思いは持ちませんでした。面白いものに会えてありがとう。

自

分はシンエヴァを公開初日と翌日連続で観に行ったのですが、二回目は自分の高校の卒業式当日でした。高校が終わったこととエヴァが終わったことで、一度に二つのモノを失ってしまったよう人生最大の喪失感を味わいました。それ以降はグルグルとさまざまなシーンを反芻しながら過ごしていましたが、シンエヴァを観る前との最大の変化として『らき☆すた』や『あたしんち』などの、人畜無害なのんびりアニメしか体を受け付けない体になっでしまいました。喪失感に対する一種の精神安定剤として摂取していたのだと思います。『あたしんち』は五周してしまいました。個人的にシンエヴァを通じて庵野監督が「エヴァを乗り越えて現実を見ろ。」と言っているような気がして二回目以降、できるだけエヴァを考えないように考えないように思っ、考察やその他エヴァ関連の情

Q.8

あなたが『エヴァンゲリオン』シリーズを知った、観たきっかけや理由、その時期(年齢)、視聴当時や現在の自分にとっての意味や影響について、自由に教えてください。

(その後の自分の生活への影響もあれば書いてください。)

回答12名

『エヴァンゲリオン新劇場版序』を金曜ロードショーで初めて見た。初めて見た時は小学生で、トラウマになってしまった。(エヴァに乗ってるシンジくんが痛そうにしてるところ) だけど、改めて観たらすごく面白かった。すごい好き！ってわけじゃないけどテレビでやってたら観るくらい。全く設定は知らないけど、新劇場版は初心者でもすんなり世界入れた。新作はまだ観れていないけど、観たいなと思ったきっかけは、SNSでの盛り上がりで、そして何よりCM。前作はすごい重い感じで終わったのに、綾波レイが田植えをしている。「田植え!!!」なんでも!!!え?!何が起ったの?!なんで田植えしてんの?!観たい!!!!」みたいな感じで「観たいな」と思った。

綾波かアスカかどっち?って聞かれたら私はアスカを選びます。

小学生か中学生の頃に兄が漫画を持っていたため一通り読んだ。久しく手に取っていないが、機械の描写と一冊が薄かった記憶がある(今見たら極端に薄くはなかった)。また、兄がアニメを見てる横で少し見たことがある。

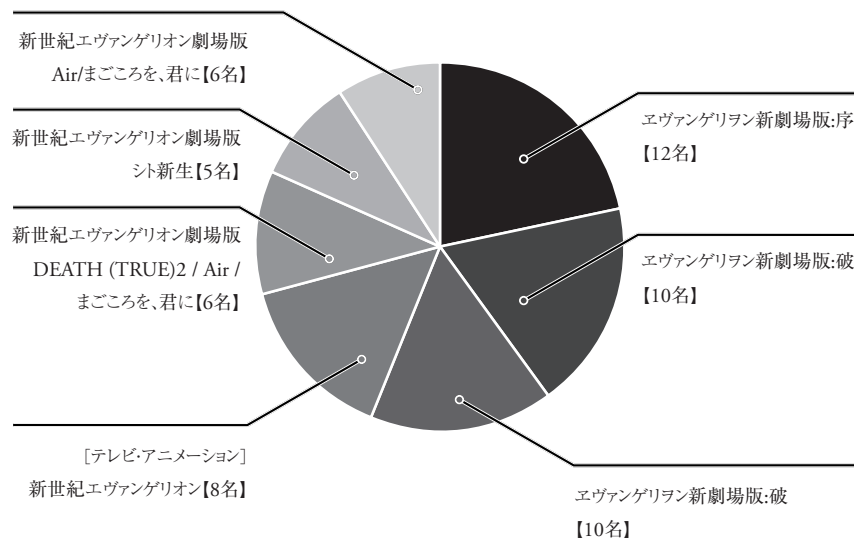
私的にエヴァンゲリオンは東方とかと同じでコアなファンが多いイメージがあり、ま

一番初めは何歳か分からないけど、小学校の頃に恐らく金曜ロードショーで序を見てエヴァンゲリオンを知った。父がエヴァを好きだったため。姉が買ってきた漫画を中学生の時に読破して、概要を知った。話も面白くて絵も好き。別のアニメや漫画の人物の関係性がエヴァに置き換えて説明されているのによく見る。納得することもよくある。

Q.7

視聴したことのある、『エヴァンゲリオン』作品を教えてください。(劇場、DVD、Blu-ray、配信等のメディアは問いません。)

回答13名



たどこから手を付けていいのかわからないため敷居が高くすさまじく沼る予感がある作品の一つである。沼る覚悟が出来たら履修したいと思っている。

知

つたきっかけは、エヴァンゲリオンを当時リアルタイムで観ていた高校の先生に二〇二一年の三月（当時私は十九歳）に勧められたこと。その後今年七月にテレビシリーズから視聴し、シンエヴァを終映直前に視聴した「シンジは僕だ、私だ」「綾波レイになりたい」と思った人は多いのではないかと感じた。中二病のような葛藤や生きている中で感じる葛藤まで描かれており、私は自分の中のシンジや綾波レイを自己の中に見つけようとした。

します。それからはエヴァの描く人間の細かな心理描写に目が行くようになり、自分が人と関わる上でも、相手の本音と建前が気になるようになりといった変化がありました。人がどんなことを考えているのか分からないということに対する恐怖を覚えてくれたのがエヴァでした。

あとエヴァ作品の特徴として世界観の緻密さが挙げられると思うのですが、語られない部分も多く、いわゆる考察という文化がエヴァファンの中ではあります。作中に描かれていることを根拠に作品の結末などを論理建てて考察する。これをエヴァ作品でよくしていたせいか、なにか映画やアニメ、漫画などだけでなく日常生活中でも、根拠を元に考えるという癖ができました。

小

学生の時、序を見たことがきっかけ。なぜ観に行ったのかは覚えていませ

シ

ンエヴァが公開される直前に友人に推されたが映画に時間を割きたくなくて言い訳していた。その後に金ローでやっているQだけでも録画してと言われたのでそこでやっと興味を持ち観ることにした。これまでアニメは深く練られていないとどこかで思っていたが、見れば見るほど複雑で少し驚いてしまった。複雑な中でも伝えたい部分はしっかりと伝わってきて感動した。ロボットの緻密な描写をたくさん動かしていたため制作過程も気になり庵野秀明監督にも興味を持った。その後庵野監督の過去作をきっかけに映画全体に興味を持ち、今までゲームやお絵描きに使っていた時間を映画鑑賞に当てる率が高くなった。

観た映画の雰囲気や文字にして自分が感じたことを明確にしたり、新しい観点を知れたりして面白いと感じられるようになった。ん。ロボットや色合いを格好いいと思っていた。小六〜中三の時、行ったことのない原宿のグッズストアに行くなどして、グッズを集めた。スマホを買ってもらったから、ケースはエヴァのにしようと思っていたことを覚えていたので、相当好きだった。都心に向くきっかけが、エヴァだった。

金

曜ロードショーで観て、怖いと思う。まだ小さいときだったので、今観たら印象が変わると思う。

小学生二年生の頃にアニメをDVDや再放送などでぎゅぐゅと観ていました。姉が観ていたのを視界に入れるくらいぎゅぐゅですが、それからは特別ハマるようなこともなく（劇場版があることも知らなかった）、新劇場版も並行して、テレビでやっ

小

学校時代になんともなくアニメを見てからどハマリ。

実

際のところ、私はエヴァという作品を認知した記憶はありません。生まれた時からアニメ版のエヴァが家に置いてあり、物心着く前、三歳くらいからそれを見ていました。父がエヴァがTV上で一大ブームを湧かせていたのに興味をもち、DVDボックスを買ったのが恐らくきっかけだと思います。

最初見た時はもちろん幼かったので意味は分からない、ただ絵がかっこいい、精神状態の描写が怖い。その程度の感想しか持っていないでした。しかし子供ながらに感性に刺さるものがあつたのかリビートして見ていました。きちんとエヴァシリーズを理解して見始めたのは最近のような気が

ているから観ていたという感じですが。そんな自分に転機が訪れたのは十七歳の時、Twitchである人の配信を観ていると「アスカの声真似をするから素材を探す」という理由で配信者が旧劇の映像を流したので、それが自分にとって忘れられないものになりました。流された場面は式号機と戦自・量産型エヴァとの戦闘シーン。当時の自分は「影なし絵」というかヌルヌル動く作画があまり好きではなく（アニメ的にはそちらの方が素晴らしいことはわかっていたのですが）、アニメといえば朝や夕方に行きつけの深夜枠の日常モノなど、それほど動きが流動でない、それどころか少しカクつくくらいが好きでした。そういう自身のいわば食わず嫌いが打ち壊された瞬間でした。ATフィールドによって弾かれたミサイルが遠方に消えていくところまで緻密に描かれた作画技術に圧倒され、量産型エヴァと対峙した時のカメラワーク

エヴァの軌跡

『シン・エヴァンゲリオン劇場版Ⅱ』

関連事項略年譜

第四話

(それ以前もですけど)、エヴァやアスカの描き込みも若干少なくなっていてそれがまた動きのある絵に繋がっているんだって気付きました。音楽やみやむーの演技もえもいわれぬものでした。というのも今こそ持てる感想で、当時はヌルヌル動く気持ち悪いものという印象しかなかったのですがその気持ち悪いものが頭から離れず、旧劇本編を何回も観ました。「エヴァってこんな自分の中に入ってくる作品だったんだ」と改めてアニメを見返したりエヴァが好きで友達と話し合うようになりました。それからは割と色んなアニメに対して抵抗というか構えることがなくなったのはエヴァのお陰だろうなと思います。自分にとっでそういう大きな影響を与えた作品でした。加えてほぼ同時期にみやむーバージヨンの『心よ原始に戻れ』を、早送りの時に流すゲーム実況を見ていたのでそれも手伝ってハマるようになりました。

小

小学三年生の時に金曜ロードショーをきっかけにエヴァンゲリオンに出会い、序破を見たあと当月上映していたQを映画館に観に行きました。破から一八〇度変わったストーリー展開に頭を抱えたことを覚えています。それからTV版、旧劇場版を観て吐くほど考察しながら中学高校と続編を待ち続けました。シンエヴァを観た今から思えばシンジを見ながら成長した十年間でした。年上だったシンジに段々と近づき今では四つも離れてしまったことがなんとも感慨深いです。

中

学生で観たTV版の最終回では頭が真っ白になり、今度こそは！と観た旧劇場版では「気持ち悪い。」と共に新しいトラウマができました。シンエヴァにも完結してくれ。という想いと、また絶

最

初に観たのは十四歳の頃で、ネットでテレビシリーズを視聴しました。当時は精神年齢が幼かったこともあり、作品で語られる真のテーマにまで気づくことはできませんでしたが、歳を重ねにつれ、何度も見返すことで、その当時の自分と主人公の共通点を度々発見しました。

『シン・エヴァンゲリオン劇場版:||』 関連事項略年譜

(春原史寛編)

2019.12.27
『シン・エヴァンゲリオン劇場版:||』の公開時期を
二〇二〇年六月二十七日と発表
2020.4.17
新型コロナウイルス感染症の影響による『シン・エヴァ
ンゲリオン劇場版:||』公開延期の発表
2021.1.14
新型コロナウイルス感染症の状況・緊急事態宣言により
公開再延期の発表
2021.3.22
『「プロフェッショナル 仕事の流儀 庵野秀明スペシャル」
(NHK 総合テレビジョン)』放送
2021.4.29
『おようなら全てのエヴァンゲリオン』庵野秀明の
1214日『(NHKBS1)』放送
2021.6.21
『シン・エヴァンゲリオン劇場版:||』上映劇場で冊子
『EVA-EXTRA-EXTRA! (「シン・エヴァの海」本)』の配
布開始。本編新バージョン『EVANGELION:3.0+1.01』
の上映開始。
2021.6.22
『シン・エヴァンゲリオン』のオールナイトニッポン(ニッ
ポン放送) 放送。
2021.7.13
『シン・エヴァンゲリオン劇場版:||』の公開初日から七
月十二日まで(二二七日間)の累計興行収入
一〇億一五八二万円、観客動員数六五五万人を突破し
たことを発表。

1994.12.26-2013.6.4

貞本義行『新世紀エヴァンゲリオン』(コミカライズ作品)
の連載、『月刊少年エース』(一九九五年二月号)、『ヤ
ングエース』(二〇〇九年七月号)に掲載。コミックス
単行本は全十四巻(カドカワコミックス・エース)。

1995.10.4-1996.3.27

テレビアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』放映

1997.3.15

『新世紀エヴァンゲリオン劇場版 シト新生』公開

1997.7.19

『新世紀エヴァンゲリオン劇場版 Air/まひつろを、君に』公開

1998.3.7

『新世紀エヴァンゲリオン劇場版 DEATH (TRUE)² / Air /
まひつろを、君に』公開

2006.9.9

『月刊ニュータイプ』(二〇〇六年十月号)で『エヴァン
ゲリオン新劇場版 REBUILD OF EVANGELION(仮題)』
の制作を発表(前編二〇〇七年初夏、中編二〇〇八年陽
春、後編完結編(同時上映)二〇〇八年初夏公開予定)。

2007.9.1

『エヴァンゲリオン新劇場版:||序
EVANGELION:1.0 YOU ARE (NOT) ALONE.』公開

2009.6.27

『エヴァンゲリオン新劇場版:||破
EVANGELION:2.0 YOU CAN (NOT) ADVANCE.』公開

2012.11.17

『エヴァンゲリオン新劇場版:||Q
EVANGELION:3.0 YOU CAN (NOT) REDO.』公開

2021.3.8

『シン・エヴァンゲリオン劇場版:||
EVANGELION:3.0+1.0 THrice upon a time.』公開

2021.8.13

Amazon Prime Video におこつて
『シン・エヴァンゲリオン劇場版:|| (3.0+1.01)』の独占配信開始

編集集後記

編集後記

折原 彩

今回、OC模擬授業に際して、本冊子に目を通していただきありがとうございました。

芸術文化学科（芸文）の特徴はこの冊子に集約されていると思います。テーマについて論じ、執筆、デザイン、編集を行う一連の作業を学科内の学生で制作できるというのは芸術文化学科の強みだと思います。デザインや編集をすることで学んだことは、あらゆる場面で応用可能なものになり得ると思います。美大の他学科に比べて、芸文は専門性がありません。油絵を描き続けるわけでも、彫刻作品を生み出すわけでもありません。芸文は専門性がない代わりに分野を横断するという特徴があります。分野を横断することで、柔軟な話し合いや活動ができる場所だと思います。美術を学びたいけど、自分には秀でたものがないと思うのなら、芸文で浅く、広く学び、さまざまな活動をしてみるのはいかがでしょうか。一つに決めなくとも、分野を横断することで見えてくるものもあるかもしれません。冊子制作にあたり、アンケートにご協力いただいた学生の皆様、エヴァンゲリオンについて共に議論を深めてくれた同級生、そして、ここまで導いてくださった春原史寛先生ありがとうございました。

加藤 ひなの

五十ページを超える、おそらく芸文初の同人誌（！）をここまで読んで頂きありがとうございます。

編集後期ということで、内容について少し触れたいと思います。他の方々の文章と比べて私の文は批評というよりは日記に近く、作品に感情に対する記述が多いです。それは、この『シンエヴァ』に対する（特に惣流・アスカ・ラングレー）の感情をそのまま当時の日記の文章を整え記載してもらっています。本当は、シンエヴァにみられるシュルレアリスムだとか庵野監督の映像などについても触れたかったのですが、私が、シンエヴァをどのように見たかということを取りアリティに示したかったのでこのような形になりました。批評的に作品を見ることは非常に大事なことです。一人でもこのように作品を見た人間の文書があっても良いかもしれないという理由です。

さて、この編集後期ですが私は編集にはあまり携わっておらず執筆を少し手伝った立ち位置です。信頼ある同級生がデザインと編集を手掛け、春原先生がこの場を作ってもらったおかげでこの形があります。

『エヴァンゲリオンシリーズ』という歴史の長いコンテンツが私たちや社会、文化に与えた影響などをこの冊子や講義に触れて少しでも興味を持って頂けたら幸いです。

山口衣織

経験則上、同人誌に必要なものとは愛と狂気だと思っている。どうにかして愛を、想いを、考えを、解釈を形にしたいと、頭を引っ掻き回し筆を進めているうちに狂っていく。愛がなければ始まらず、狂気がなければ続かない。

この冊子を作っているときの熱量は、同人誌を描いているときの愛と狂気そのものだった。「個人原稿の章はアニメエヴァ最終回あたりのパロで〇〇〇〇、彼女の場合ってやりたいな」と言ったら普通に採用されたあたりから狂い始めた。もうこれは狂いのフェーズに入ってもいいやつだ、と味を占め、気づけば愛と狂気とエヴァパロに溢れた授業配布資料が完成した。またの名を芸文版「シンエヴァの薄い本」。（ちなみに参考にした本家「シンエヴァの薄い本」より随分とページ数も文量も増えている。）

いつもの同人誌であれば愛と狂気は一人で完結するが、この冊子における愛と狂気は様々な人のおかげで成り立っている。自主勉強会で共に学んだことから始まり、この冊子の編集や執筆を手がけてくれた同級生、アンケートにご協力いただいた芸文生に感謝すると共に、改めて様々なことをお許しいただきこのような機会を作ってくださった春原先生に心より感謝申し上げます。

私たちは映画『シン・エヴァンゲリオン劇場版:||』 をどのように見たのか

武蔵野美術大学オープンキャンパス2021年9月 芸術文化学科模擬授業 資料集

2021年9月25日 デジタルブック発行

執筆

折原 彩

加藤ひなの

山口衣織

春原史寛

アンケート協力

芸術文化学科の皆さん

デザイン

山口衣織

編集

折原 彩

監修

春原史寛

発行

武蔵野美術大学芸術文化学科春原研究室

fsunohara@musabi.ac.jp

〒187-8505 東京都小平市小川町1-736

私たちは映画

『シン・エヴァンゲリオン劇場版:||』

をどのように見たのか